

第3章

生活者の健康と薬・医療とのかかわり

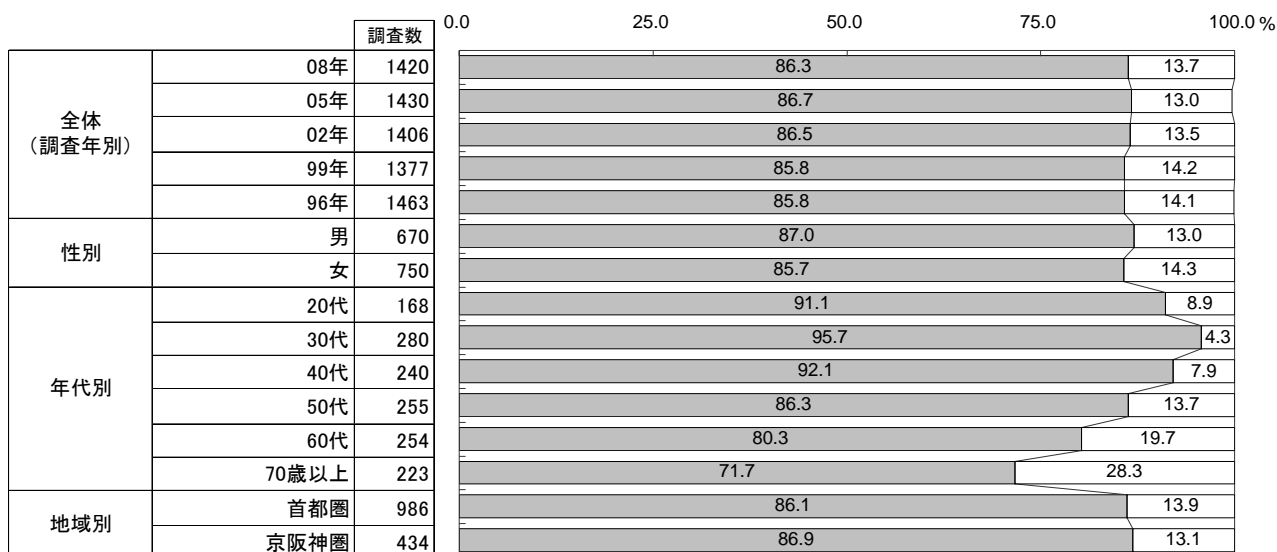
1 健康状態と受診経験

(1) 健康状態 [F5]

86.3%が自分は「健康」と認識

- 05年調査に比べ0.4ポイント減少したものの86.3%の人が自分は「健康」と答えており、過去4回の調査結果とほぼ同程度の比率となっている。
- 年代が上がるにしたがって、「不健康」と認識している人の比率が増える傾向がみられ、〈70歳以上〉では28.3%が「不健康」と回答している。

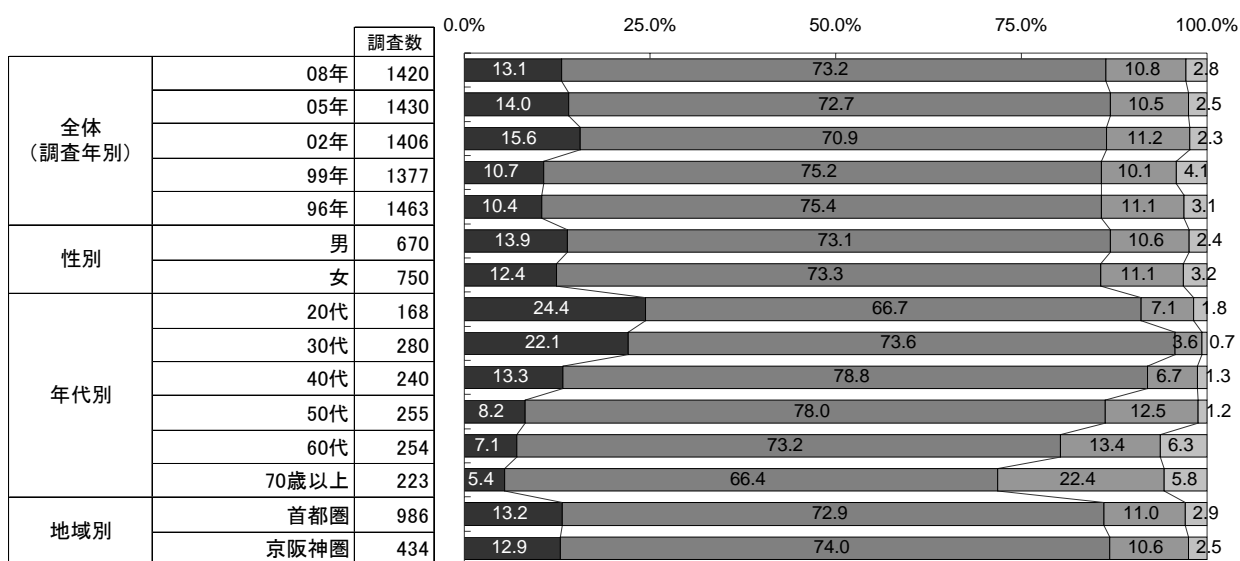
図表69. 健康状態－①[全体／属性別]



注)「無回答」除く

■ 健康層 □ 不健康層

図表70. 健康状態－②[全体／属性別]



注)「無回答」除く

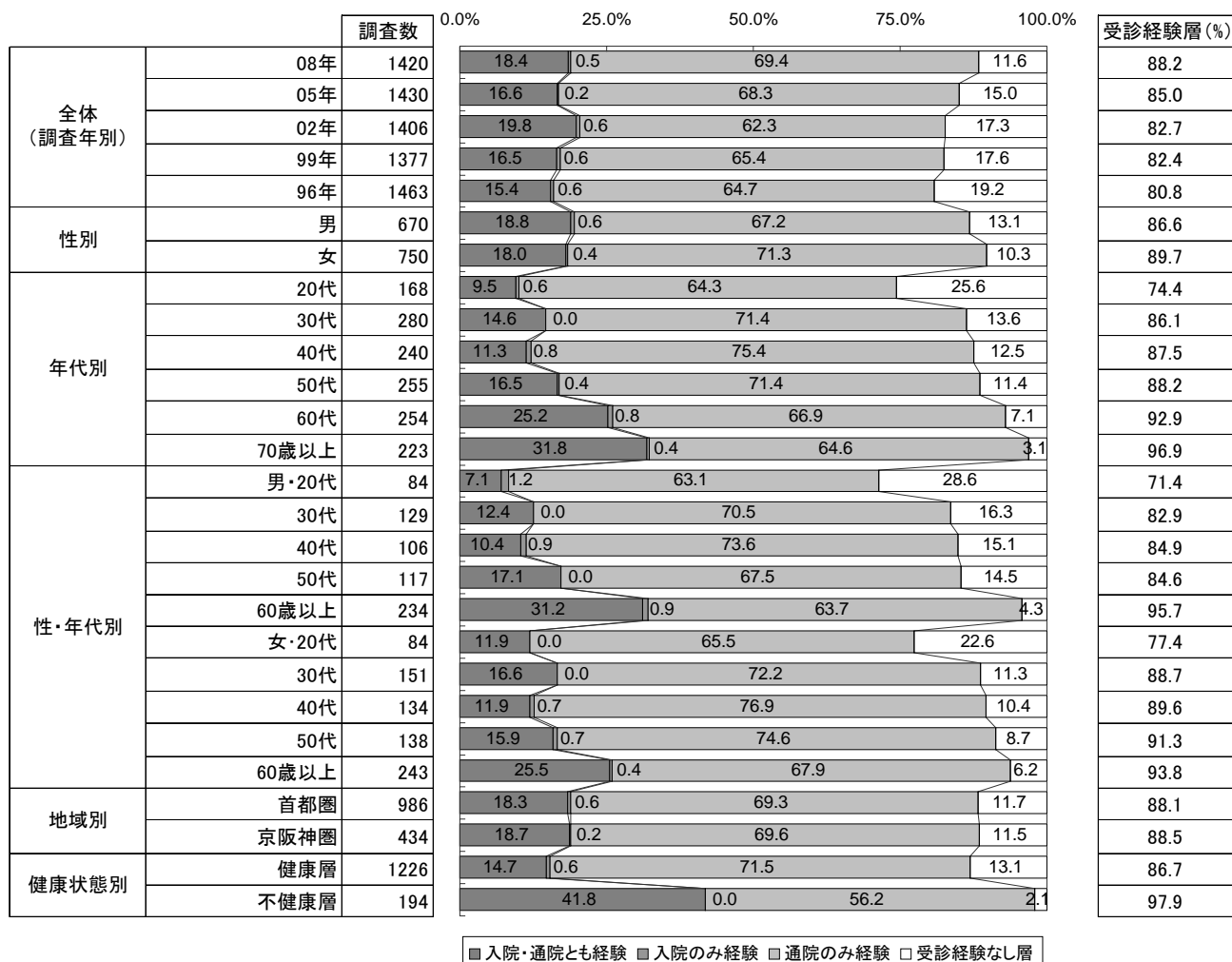
■ 非常に健康 ■ まあ健康(普通) ■ あまり健康でない ■ 健康でない

(2) 受診経験 [問1-〈1〉*〈2〉]

受診経験率は88.2%で漸増続く

- 「入院」および「通院」したことがある「受診経験層」は88.2%で、過去最高だった05年調査の85.0%を上回る結果となっている。
- 過去3年間に「通院」したことがある人は87.7% (05年調査84.8%)、過去5年間に「入院」したことがある人は18.9% (同16.8%) で、いずれも05年調査の結果よりも増加している。
- 「入院・通院とも経験」と回答した人の比率は、年代が上がるにしたがって高くなる傾向がみられ、〈70歳以上〉で31.8%となっている。
- 健康状態別では、〈不健康層〉で、受診経験が97.9%と、他の属性に比べると最も高い比率となっている。

図表71. 受診経験[全体/属性別/要因別]



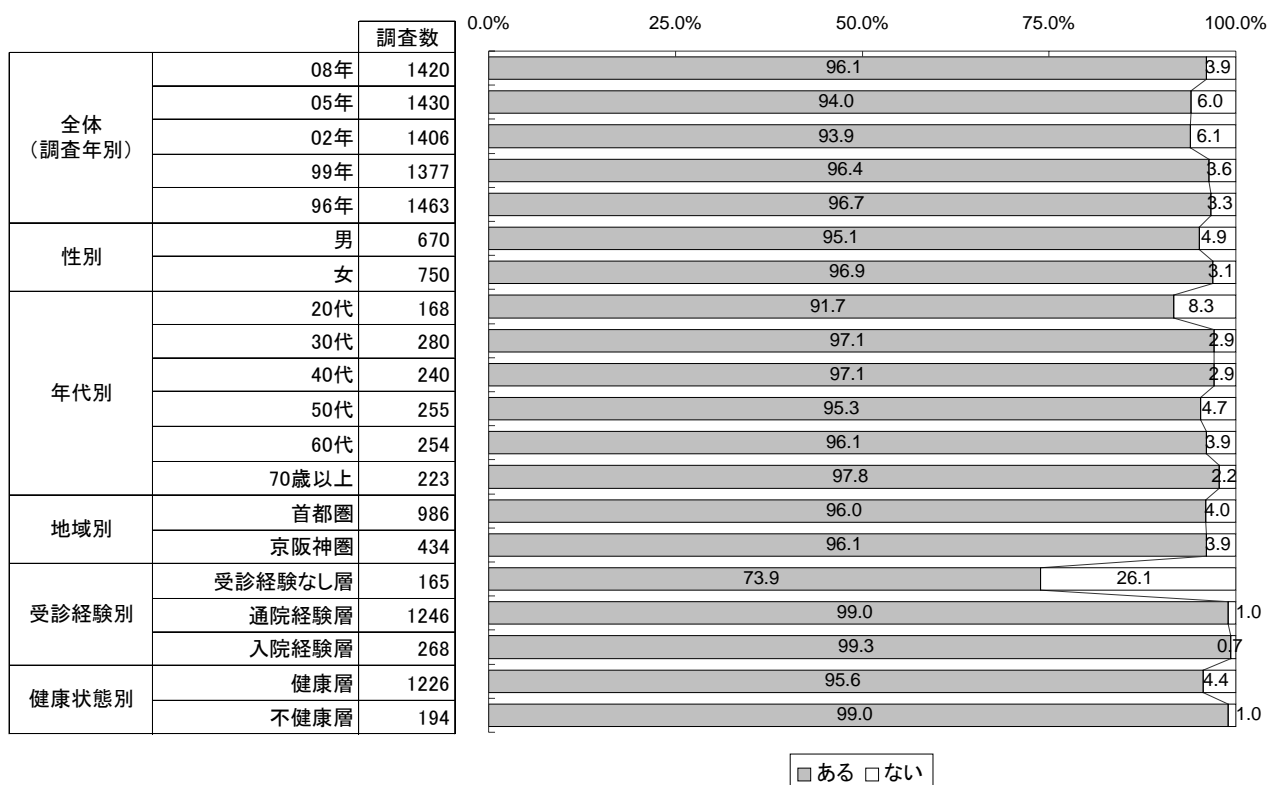
注)「無回答」除く

(3) 処方薬の服用経験 [問2]

処方薬の服用経験率は96.1%

- 処方薬の服用経験がある人は、過去4回の調査では漸減傾向にあったが、08年調査では96.1%と増加に転じている。
- 相対的にみて、〈通院経験層〉〈入院経験層〉および〈不健康層〉で服用経験率が高くなっている。

図表72. 処方薬の服用の有無[全体/属性別/要因別]



注1)「無回答」除く

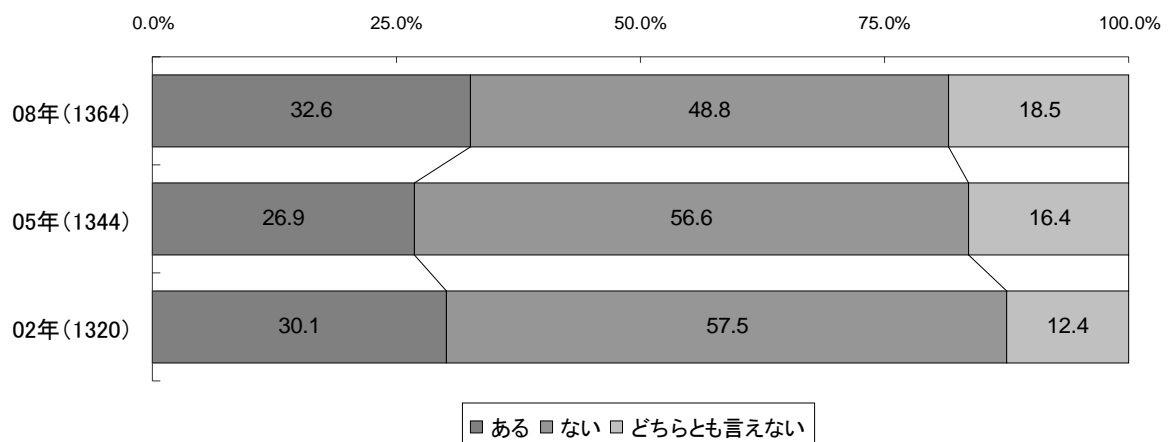
注2)「受診経験」は、「通院経験」が過去3年間、「入院経験」は過去5年間の経験で聞いていることから、「受診経験なし層」でも、それ以前に経験していれば、「処方薬の服用の経験」はありうる。

(4) かかりつけ薬局の有無 [問6]

かかりつけの薬局がある人は32.6%、薬局との密な関わりが70歳以上で顕著

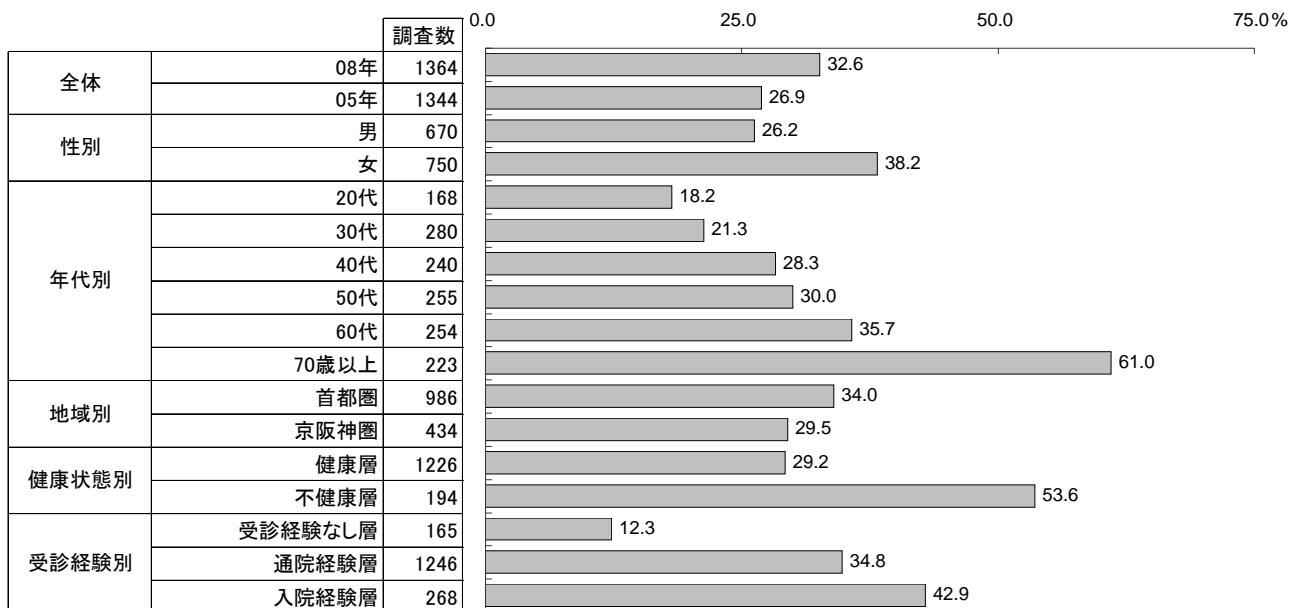
- かかりつけの薬局が「ある」と回答した人は全体で32.6%となっており、05年調査に比べ5.7ポイント増と、薬局との密な関わりが進行していることを示している。
- 属性別にみると、性別では〈女性〉、年代別では〈70歳以上〉、健康状態別では〈不健康〉、受診経験別では〈入院経験層〉でかかりつけ薬局が「ある」と回答した人の比率が高くなっている。

図表73. かかりつけ薬局の有無[全体/08年/05年/02年]



注)「無回答」除く

図表74. かかりつけ薬局がある人の比率[全体/属性別/要因別]

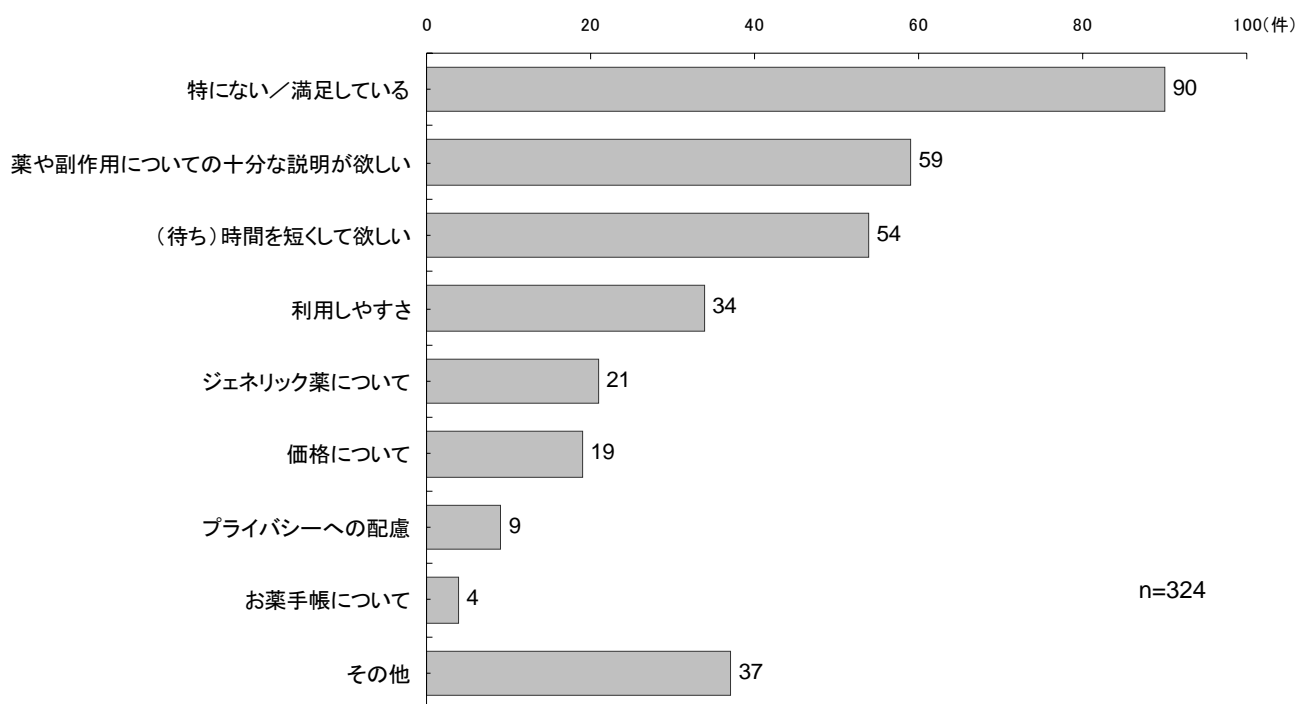


(5) 利用している薬局に対する要望〔問7 自由意見〕

「特にない／満足している」が最も多いが、「薬や副作用についての十分な説明が欲しい」などの要望も

- 利用している調剤薬局に対する要望で最も多かったのは、「特にない／満足している」で90件、次いで「薬や副作用についての十分な説明が欲しい」が59件、「(待ち)時間を短くして欲しい」54件などが続いている。
- 特に何も無い、という意見も含め、満足しているという意見が多くなっている。

図表75. 利用している薬局に対する要望〔全体／08年〕



注)問7の記入率は23.7%、324件であったが、記入された文章の中で異なる考え方が併記されている場合は、ひとつの意見としてカウントしていることから、合計のn数とは一致しない。

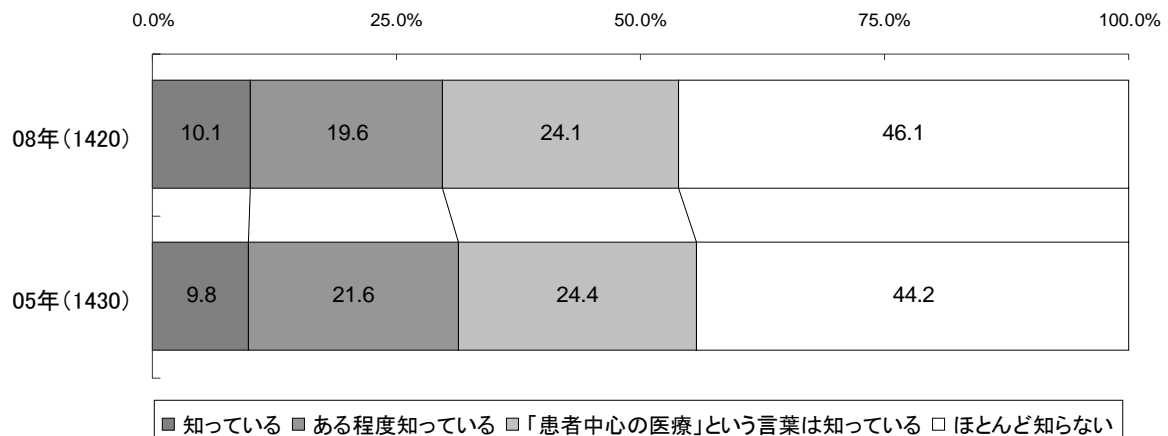
2 「患者中心の医療」に対する認識

(1) 「患者中心の医療」の認知〔問18〕

認知層は53.8%で、05年調査結果に比べ2.0ポイントの減少

- 「患者中心の医療」の認知度については、「知っている」が10.1%、「ある程度知っている」が19.6%、「患者中心の医療という言葉は知っている」が24.1%、「ほとんど知らない」が46.1%となっており、「ほとんど知らない」を除いた認知層全体が53.8%となっており、05年調査の55.8%に比べ2.0ポイント少なくなっている。
- 属性別にみると、性別では〈女性〉、年代別では〈60代〉以上、職業別では〈主婦〉〈その他〉の認知度が相対的に高くなっている。

図表76. 「患者中心の医療」に対する認知〔全体／08年／05年〕



注)「無回答」除く

図表77. 「患者中心の医療」に対する認知〔全体／属性別〕

(単位: %)

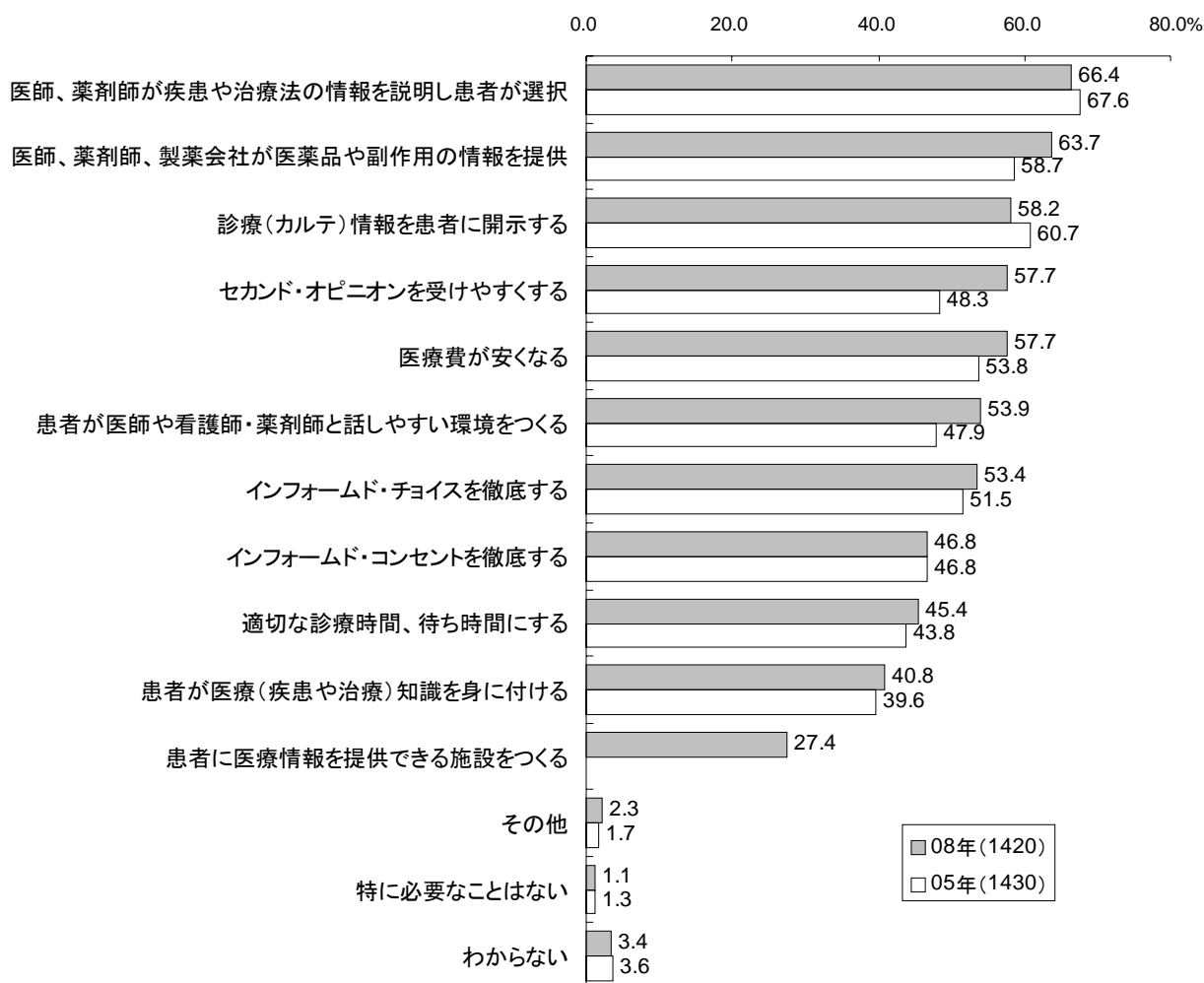
		調査数	知っている	ある程度知っている	「患者中心の医療」という言葉は知っている	ほとんど知らない
全体	08年	1420	10.1	19.6	24.1	46.1
	05年	1430	9.8	21.6	24.4	44.2
性別	男	670	8.2	19.4	21.8	50.6
	女	750	11.7	19.9	26.1	42.0
年代別	20代	168	7.1	8.9	19.6	64.3
	30代	280	8.2	13.2	23.2	55.4
	40代	240	8.8	20.8	22.9	47.5
	50代	255	9.4	23.9	23.1	43.1
	60代	254	11.8	22.8	25.2	39.8
	70歳以上	223	14.8	26.0	29.6	29.6
地域別	首都圏	986	9.1	20.1	24.6	46.0
	京阪神圏	434	12.2	18.7	22.8	46.1
職業別	自営層	164	9.1	25.0	19.5	46.3
	経営・管理職	77	7.8	20.8	27.3	44.2
	事務系勤め人層	244	9.8	15.2	23.4	51.6
	労務系勤め人層	171	4.1	13.5	22.2	60.2
	主婦	474	10.8	19.8	25.5	43.5
	その他	287	13.9	23.0	25.4	37.6

(2) 「患者中心の医療」に必要なこと [問19]

医療側、製薬会社に対し、情報の提供・開示を求める意識が高い

- 患者や家族の立場として、「患者中心の医療」に必要なことは何か尋ねたところ、最も多かったのが「医師、薬剤師が疾患や治療法の情報を説明し患者が選択」で66.4%、次いで「医師、薬剤師、製薬会社が医薬品や副作用の情報を提供」で63.7%、「診療(カルテ)情報を患者に開示する」が58.2%で続いている。
- 05年調査に比べて「セカンド・オピニオンを受けやすくする」が9.4ポイント、「患者が医師や看護師・薬剤師と話しやすい環境をつくる」が6.0ポイント上がった。また、08年調査で新たに設けた「患者に医療情報を提供できる施設をつくる」は27.4%であった。
- 総体的にみて、医師、薬剤師、製薬会社に対し、情報の提供、開示を求める意識が高い。

図表78. 「患者中心の医療」に必要なこと[全体/08年/05年]【複数回答】



注1)05年調査からの選択肢の変更は以下の通り

「医師、薬剤師が疾患や治療法の情報を説明し患者が選択」は、05年調査では、「医療側が疾患や治療法の情報を提供する」

「患者が医師や看護師、薬剤師と話しやすい環境をつくる」は、05年調査では、「患者と医師や看護師・薬剤師が話しやすいようになる」

注2)「患者に医療情報を提供できる施設をつくる」は、08年調査において新たに設けた設問

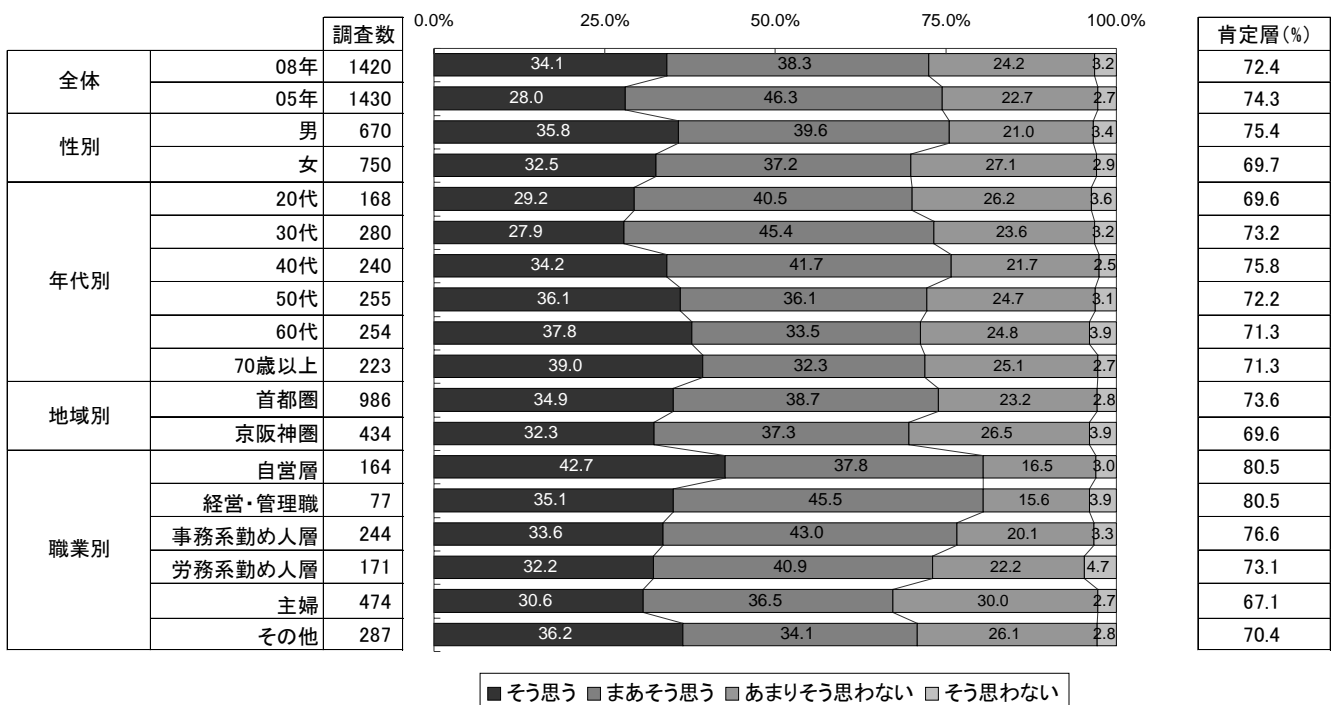
3 薬と学校教育

(1) 学校教育の中で薬について教える必要性の有無 [問28]

05年調査に比べ微減ながら全体の72.4%が必要性を感じている

- 学校教育の中で薬について教える必要性の有無について尋ねたところ、「そう思う」が34.1%、「まあそう思う」が38.3%で、双方を合わせた肯定層は72.4%となっている。
- 「そう思う」は、05年調査に比べ6.1ポイント増加しているものの、「まあそう思う」が8.0ポイント減少したことにより、肯定層全体では1.9ポイントと僅かではあるが減少している。
- 年代別では、〈40代〉、地域別では〈首都圏〉、職業別では〈自営層〉〈経営・管理職〉で肯定層の比率が高くなっている。

図表79. 学校教育の中で薬について教える必要性の有無〔全体／属性別〕



注1)「無回答」除く

注2)「肯定層」は、「そう思う」、「まあそう思う」の合計比率

(2) 学校教育の中で薬についてどのようなことを教えて欲しいか [問28-1]

「副作用」「薬の役割」「正しい飲み方」「乱用防止」「作用・効果」

- どのようなことを教えて欲しいかについて尋ねたところ、最も多かったのは「薬の副作用」で75.5%、次いで「薬の役割」が68.9%、以下、「薬の正しい飲み方」「薬の乱用防止」「薬の作用・効果」の各選択肢が60%を超えている。

図表80. どのようなことを教えて欲しいか[全体/属性別]【複数回答】

